

農業技術 プリズム

県内のバレイシヨ栽培では、春作終了から秋作開始までの5

バレイシヨ畑に適した緑肥の特性

科名	草種名	播種量 (kg/10a)	二期作バレイシヨ体系に適した播種期	酸性土壌適応性	多湿適応性	土壌の植被効果	土づくり効果	すき込み作業性	肥料的効果	腐熟しやすさ	土壌流亡抑制
イネ	エン麦野生種	8~10	4月下旬~5月上旬	○	△	○	○	○	○	○	○
イネ	スーダングラス	3~5	5月中旬~6月上旬	○	○	○	○	×	×	×	○
イネ	ヒエ(ミレット)	3	5月中旬~6月中旬	△	○	○	○	×	×	×	○
マメ	クロタリア・スペクトルリス	5~6	5月中旬~6月上旬	△~○	△	△	△~○	○	○	○	△
キク	ヒマワリ	4	5月中旬~6月上旬	○	○	○	○	△	△	△	△

春作バレイシヨ 収穫後に緑肥を栽培 梅雨の土壌流亡抑制

9月は裸地状態で、梅雨期の土壌流亡が問題となっており、土壌流亡抑制には、春作後圃場に適する緑肥の草種を検討する。緑肥(カバークロップ)栽培が効果的ですが、「適期播種(はしゅ)・すき込み作業が困難」

29種類の草種について、酸性土壌での生育適応性、耐湿性や土壌流亡の抑制効果、すき込み作業性、土づくり効果や収量性の向上などを調査した結果、エン麦野生種、スーダングラス、ヒエ、クロタリア、ヒマワリなどが適する草種と考えられます。圃場条件や目的に合わせて適した草種を選べるように、特性を表に示します。

「そうか病の発生が心配」などの理由により、緑肥栽培の導入がなかなか進んでいません。また、多くのバレイシヨ圃場(ほじょう)では、そうか病抑制のために石灰資材の施用を控えています。そのため、強酸性土壌

が深く、緑肥の生育にも影響が及びます。そこで、バレイシヨ圃場に適する緑肥の草種を検討しました。

緑肥導入による経済効果は10ア当たり3万9350円と試算されます。その内訳は、収量の向上で3万2250円(単収2500キ/10ア×10%増収×129円/キ)、マメ科草種を用いた場合の肥料の削減で6200円(窒素10ア当たり2キを硫安で換算)、土壌流亡抑制で6480円(土壌流亡量3ト/10ア×90%抑制×客土費用2400円/ト)です。

(県農林技術開発センター 尾崎哲郎)